～校長通信～

ふたばっ子とともに

R4.7.21

４/６の始業式でスタートした１学期が、明日（７/２２）で終わります。
子供たちの学校での様子を見ていると、夏休みを目前にして、気持ちが高揚しているのが分かります。
１学期の目標の１つとして、「返事と挨拶をがんばりましょう。」と始業式で伝えました。その挨拶に関連した今学期の私の取組についてお伝えします。

「さようなら」が、明日の力に

１日の活動を終えて、下校する子供たち。
南門から帰る子供たちは、類にもれず、校長室東窓の外を歩いていきます。最近は、その子たちと「さようなら」の挨拶や会話を交わすのが、なんとなく日課となり、楽しみにもなっています。
実のところ、この取組は、特別、何かを意識してはじめたものではありません。始まりは、こんな感じでした。

４月の中頃、窓の外に声が聞こえたので、何気なくブラインドを開けると、下校する子が２人、窓の前に立ち止まって話をしていました。私は、窓も開けて、その２人に話し掛けると、今日の出来事を楽しそうに話してくれました。
そして、私が、
「では、また明日。さようなら。」
と言うと、２人は、
「校長先生、さようなら。また明日。」
と、とても明るく爽やかに挨拶をして、家路につきました。

この日から、子供たちが下校する時には、できる限りブラインドと窓を開けて、「さようなら。」の挨拶が交わせるようにしようと考えました。

自分から進んで、大きな声で、
「さようなら！」
と言って帰っていく子。こちらの声掛けに、
「さようなら。」
と返してくれる子や、立ち止まって今日の出来事や楽しかったことを話して

から帰る子。帰宅後にある習い事のことや家族のこと、休日に出掛けたこと、家で飼っているペットのことなどを教えてくれる子もいます。一人一人、表れや反応は様々です。エアタッチやグータッチ、じゃんけんをしてから帰る子も。先日は、生活科で育てて収穫した野菜を見せてくれる子もいました。

それでも中には、友達との会話に夢中になったり、何か考え事をしていたりして、まっすぐ前を向いて窓の前を通り過ぎていく子もいます。ただ、前日はそうだった子の中にも、次の日は、きちんと顔を向けて、
「さようなら。」
と言ってくれる子やある日突然、挨拶をするようになる子もいるので、決してこちらから無理強いすることはしません。

また、私自身が出張で不在だったり、来客があったりして、子供たちの呼び掛けに全く対応できない時もあります。もしかしたら、「今日はこのことを話そう」と考えてきた子もいるかもしれないので、毎日必ず挨拶や言葉をかわせるわけではないことを、少し申し訳なく感じてもいます。

はじめのうちは、１、２年生の子供たちが中心でした。次第に、３、４年生、５、６年生と、自分から進んで挨拶をする子が増えてきました。５、６年生の中には、友達と話しながら歩いていても、窓の前を通り過ぎるときには会話を切って、目を合わせ、きちんと「さようなら。」と言ってくれる子たちも出てきました。その姿を見ていると、さすが高学年だなぁと感心させられます。低学年の子供たちの下校時は、立ち止まってひと言ふた言話してくれる子が多いので、窓の外は大盛況です。

１学期後半になると、私が、書類づくりのために集中してパソコンと向き合っていて、ついうっかり下校時刻を過ぎ、ブラインドと窓を開け忘れていても、
「校長先生!!」
と言いながら、窓をこつこつと叩いて知らせてくれる子たちも出てきました。その上、私が仕事を中断して対応したのを知った時には、帰りがけに、
「では、お仕事頑張ってください。さようなら。」
と優しい言葉を伝えてくれる子たちもいます。

双葉小は、南門以外に、西門から、東門から、お迎えで、放課後児童会にと下校の方向や方法は様々ですから、私が関わっている子が限られているのは分かっています。でも、南門から帰る子たちの挨拶に触れていると、なんとなく学校全体の挨拶の状況がどんな感じなのかは、把握できるのではないかと思っています。

過日、人との出会いについて書かれたあるエッセイを読みました。その中に、挨拶について語られた部分がありました。うろ覚えですが、大筋次のような内容でした。

「出会い」を大切に受け止めようとしている心の姿勢は、日常の小さな言動の中にも表れてくるものである。

例えば、様々な人たちと交わす挨拶。私たちが進んで挨拶するときは、相手に心を開き、その場での「出会い」を前向きに受け止める準備ができている。
でも、イライラ、せかせかとした気持ちのときは、そうした準備はしにくいと考えられる。なぜなら、心に余裕がなくて「忙しい」とばかり思っていると、人との「出会い」をよりよく生かそうとする気持ちは薄れてしまうかもしれないからだ。また、相手を受け入れようとしなかったり、かたくなな気持ちでいたりする場合も、その「出会い」を自分自身の人間的成長に繋げていくことはできないと思われる。

子供たちの「さようなら」の挨拶は、きっと、その子のその日の満足度や今現在の心持ちを如実に表しているのだと考えます。実際に、いつもは元気よく挨拶する子が、その日は全く声に張りがない時、
「いつもと違うじゃない。どうかしたの。」
とたずねると、「今日は、疲れた。」とか「家に帰ってやることがたくさんあるから。」とそれなりに納得のいく理由が語られます。

子供たちが掛けてくれる「さようなら」は、私にとって、いや私たち職員にとって、明日につながる力となっています。
学校生活が楽しく充実していれば、子供たちの不安や悩みが少しでも小さくなれば、１日の活動を終えた満足感とともに発せられる「さようなら」の声は、さらに明るく爽やかなものになっていくことでしょう。

１日の終わりに、子供たちから明日につながるより大きな力を分けてもらえるように、職員一同、不安や心配のない楽しい学校づくりに、今後も努めていきたいと思います。